

# 東部保健福祉センター管内における若年妊産婦の現状と課題

静岡市葵区役所健康支援課東部保健福祉センター

○栗田里紗、米山綾美、内藤望

## I. 要旨

東部保健福祉センター管内では平成 22 年度から平成 26 年度の妊娠届出数に対する若年妊婦(妊娠届出時 18 歳以下)の占める割合が 0.9%と静岡市全体、葵区全体の 0.6%と比較して高かった。

そこで、東部保健福祉センター管内の無作為抽出した妊産婦と若年妊産婦との比較を行い、東部保健福祉センター管内の若年妊産婦の傾向を明らかにし、それに対する支援について検討したので報告する。

## II. 目的

東部保健福祉センター管内の若年妊産婦に関する現状を把握し、今後の保健活動(主に妊娠中の支援)について検討する。

## III. 方法

### 1. 対象

- ・平成 22 年度から平成 26 年度に母子健康手帳を交付した妊娠届出時 18 歳以下の若年妊婦 39 名中、データの得られた 38 名(妊娠届出時東部保健福祉センター管内に住民票があった者)
- ・平成 22 年度から平成 26 年度母子健康手帳を交付した妊婦のうち、無作為抽出した妊婦 111 名(18 歳以下の若年妊婦は除く、妊娠届出時東部保健福祉センター管内に住民票があった者)

### 2. 調査方法

上記の対象者について、妊娠届出書、妊娠届出時アンケート、育児支援チェックリスト、エジンバラ産後うつ質問票、赤ちゃんへの気持ち質問票、新生児訪問時の訪問記録より、データを収集。若年妊産婦群(以下若年群とする)と無作為抽出した妊産婦群(以下無作為群とする)のデータを $\chi^2$ 乗検定または単純集計にて比較をした。

## IV. 結果

### 1. 妊娠届出書より

妊婦の年齢は若年群が 15~18 歳、無作為群は 19~42 歳。妊娠届出時の週数は若年群が平均 15.0 週(分娩後届出 1 例は除く)、無作為群は平均 9.4 週だった。妊娠 22 週以降の届出は若年群は

13.2%(分娩後届出 1 例は除く)、無作為群は 0.9%であった。また、中絶回数は若年群平均 0.4 回、無作為群が 0.06 回であった。

## 2. 妊娠届出時アンケートより

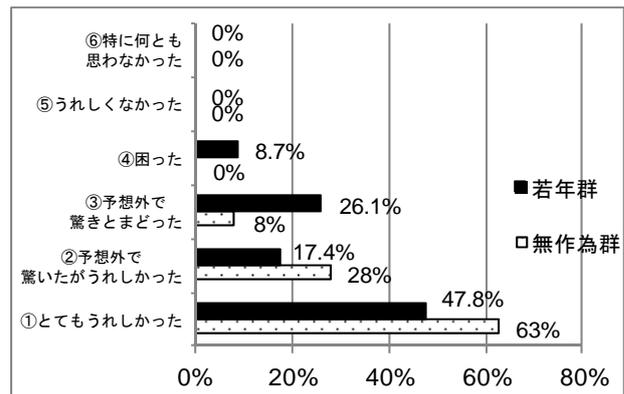
### 1) 世帯構成

若年群は親と同居 87.0%、核家族(パートナーと同居) 8.7%、その他(単身等) 4.3%だった。無作為群は同居 12.0%、核家族 88.0%、その他 0%だった。

### 2) 妊娠を知った時の気持ち

若年群は「予想外で驚きとまどった」と答えた割合が 26.1%、「困った」と答えた割合が 8.7%と無作為群と比較し、高かった。(図 1)

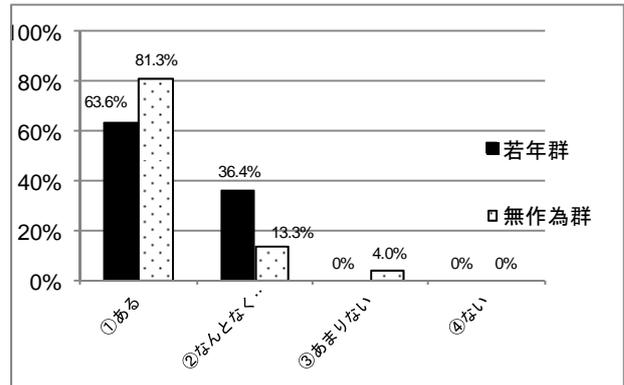
図 1. 妊娠を知った時の気持ち



### 3) 愛情を受けて育ったという実感があるか

若年群は「ある」と答えた割合が 63.6%と無作為群と比較して低く、「なんとなくある」と答えた割合が 36.4%と無作為群と比較して高かった。(図 2)

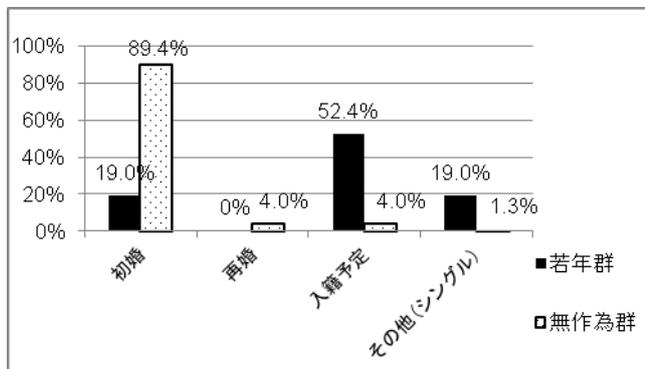
図 2. 愛情を受けて育ったという実感がありますか



#### 4) 婚姻形態

若年群は「初婚」と答えた割合が 19.0%と無作為群と比較して低く、「入籍予定」と答えた割合が 52.4%と高かった。(図 3)

図 3. 婚姻形態



#### 3. 妊産婦訪問・相談票より (新生児訪問時)

若年群では「協力者あり」と答えた割合は 100.0%と、無作為群の 95.0%と比較して高かった。

#### 4. 育児支援チェックリストより

- 1) 今までに心理的な、あるいは精神的な問題で、カウンセラーや精神科医、または心療内科医師などに相談したことがあるか

若年群では「はい」と答えた割合が 27.3%と無作為群の 8.2%と比較し、有意に高かった ( $P < 0.05$ )。相対危険度は 3.33 倍であった。

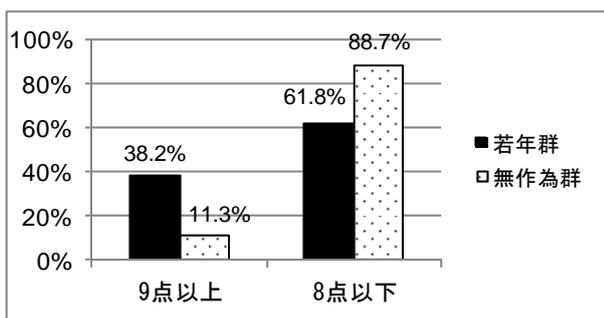
- 2) 赤ちゃんを叩きたくなることがありますか

若年群では「はい」と答えた割合が 5.9%と無作為群の 3.1%と比較し高かった。

#### 5. エジンバラ産後うつ質問票より

得点が「9 点以上」だった割合が若年群は 38.2%と無作為群の 11.3%と比較し、有意に高かった ( $P < 0.05$ )。相対危険度は 3.38 倍であった。(図 4)

図 4. エジンバラ産後うつ質問票結果



#### 6. 赤ちゃんの気持ち質問票より

赤ちゃんの気持ち質問票(ボンディング)の点数が「7 点以上」だった割合は、若年群で 2.9%、無作為群で 4.1%と若年群の方が低かった。質問項目別にみると、全項目で「ほとんどいつも強くそう感じる」「たまに強くそう感じる」と答えた割合は両群を比較して大きな差はなかった。違いがみられた項目として「赤ちゃんのことが腹立たく嫌になる」に「たまに少しそう感じる」と答えた割合は若年群が 26.5%と無作為群の 10.3%と比較して高かった。また「特別な気持ちがわからない」に「たまに少しそう感じる」と答えた割合が若年群では 12.9%と無作為群の 1.0%と比較して高かった。さらに「赤ちゃんを身近に感じない」に「たまに少しそう感じる」と答えた割合は若年群が 17.6%と無作為群の 6.2%と比較して高かった。

#### V. 考察

##### 1. 早期の介入

本研究では、若年群は無作為群と比較し、妊娠届出週数が遅いという結果が出ており、また妊娠を知った時に「予想外で驚きとまどった」「困った」と答えた割合も高い。10 代の妊娠では、初診の時期は遅く、そのため望まない妊娠を継続せざる得ない状況、妊婦健康診査を受けない、母親教室などにも参加しない、妊娠・出産に関する知識が不足し、妊娠中の健康管理ができないという事実がある<sup>1)</sup>とされており、妊娠を受け入れられていない状況かつ出産までの期間が短い中で、妊娠中に様々な支援が必要とされる。妊娠届出後、早期に接触し、それぞれの問題に対して支援を開始して行くことが必要である。10 代妊婦が専門職に接触する機会は、病産院での看護職と地域の保健師に限られると言っても過言ではない<sup>2)</sup>とされており、妊娠届出時の面接で接触機会を逃さず、本人や同行した家族等から情報を詳細に聞き取っていくことが必要とされる。また本人や家族等に保健師が支援していく必要性を伝え、その場で地区担当保健師との顔合わせや担当の名前を伝える等で、その後の支援につなげていく必要がある。

さらに若年妊婦からは「お金がない」「今後必要

な手続きがわからない」という声も聞かれており、保健師だけでなく、妊娠中から関係課への相談につなぐことで不安を軽減できると思われる。また必要時妊娠中から医療機関と連携した支援を行っていくことも大切である。

## 2. 家族への支援

本研究では、若年群は親と同居している割合が高く、協力者もいるという結果が出ている。しかし、「愛情を受けて育った実感がある」と答えた割合は無作為群より低かった。先行研究においても、若年妊婦は自らの複雑な家庭背景からの脱却や愛情の欠落を埋めるために、父母の揃った暖かい家庭に憧れて希望を抱くことにより、若年での妊娠継続や出産を決意することが明らかになっている<sup>3)</sup>。そのため、家族関係に問題がある可能性も考えられる。

また本研究では若年群では妊娠届出時の婚姻形態について、「入籍予定」「その他(シングルマザー等)」と答えた割合が無作為群よりも高く、若年群では婚姻関係がない状態での妊娠が多い。10代妊婦の相手男性の精神的な未熟さは先行研究<sup>3)</sup>でも確認されており、パートナーについてもアセスメントし、それに対する支援も必要だと思われる。

パートナーが父親としての責任を果たし、不足分を両親等が補えば若年であっても育児に支障はないとされており<sup>4)</sup>、妊娠中から本人だけでなく、親やパートナーも含め、家族の支援を検討していく必要があると思われる。

## 3. 精神面の支援

本研究では若年群は無作為群と比較し、精神科医または心療内科医、カウンセラーなどに相談したことがあると答えた割合が高く、エジンバラ産後うつ質問票の点数が9点以上だった割合も高かった。この結果より、若年妊産婦は精神的に不安定になりやすい傾向にあることがわかる。赤ちゃんを叩きたくなると答えた割合も無作為群と比較して高く、本人の精神的な不安定さが児に影響することも示唆される。

また若年群は中絶回数が無作為群と比較して

多い傾向がある。中絶について、先行研究では中絶体験の後悔が今度の妊娠こそは継続させて児を生みたいと願う気持ちになる<sup>3)</sup>とされている。

一般的に青年期は親からの心理的離乳によって自己を確立していく過渡期であり、このような時期に妊娠が判明することは「子ども」の立場から「親」「妻」役割を担う立場に急激な移行を迫られることになり、さらに、その後は成長途上にありながらも現実的な育児に追われ、心身共にストレスフルな状況におかれることになる<sup>2)</sup>とされている。妊娠中から上記をふまえ、本人の心理状況に合わせ、丁寧な関わりをしていくことが大切である。そして産後に精神状態の安定が図れるよう、マタニティ教室への参加や個別支援を通して、産後の育児についてイメージができ、前向きに出産・育児に臨めるような支援をしていく必要がある。

本研究に関して、地域診断研修にてご指導、ご協力をいただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

## (参考文献)

- 1) 赤井由紀子, 松嶋紀子: 十代妊婦の支援体制への課題, 川崎医療福祉学会誌, Vol. 20, No. 1, 243-247, 2010
- 2) 小川久貴子, 安達久美子, 恵美須文枝: 10代妊婦に関する研究内容の分析と今後の課題-1990年から2005年の国内文献の調査から-, 日本助産師学会誌, Vol. 20, No. 2, 50-63, 2006
- 3) 小川久貴子, 安達久美子, 恵美須文枝: 10代女性が妊娠を継続するに至った体験, 日本助産師学会誌, Vol. 21, No. 1, 17-29, 2007
- 4) 玉城清子, 上田礼子: 若年母親の新生児に対する知覚と育児行動, 沖縄県立看護大学紀要第8号, 2007